

# コロナ禍における法文学部の 被災記録の収集と保存Ⅵ

## — 2021年度学生手記の分析 —

青木理奈・鈴木 静・福井秀樹  
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子  
池 貞姫・十河宏行・中川未来

### 1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曾有の災厄である。愛媛大学も、急激な感染拡大に伴い、教育提供体制が激変して3年目を迎えようとしている。

今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していけば、それは、次なる災厄への備えになるだろう。なにより、長期化するコロナ禍において、時系列で保存できるよう、継続的に記録・収集することが重要であると考えている。本プロジェクトは、未曾有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化することを最終目的とする。これまで愛媛大学法文学部の学生を対象とし、アンケートを2020年度<sup>1)</sup>と2021年度<sup>2)</sup>に実施し、学生手記を収集・分析<sup>3)</sup>、座談会を開催<sup>4)</sup>してきた。

---

1) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ—学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果—」『愛媛大学法文学部論集』第50号（社会科学編），pp. 37-68. 2021年2月。

2) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ—2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果—」『愛媛大学法文学部論集』第52号（社会科学編），pp. 19-54. 2022年2月。

3) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ—2020年度学生手記の分析—」『愛媛大学法文学部論集』第51号（社会科学編），pp. 93-111. 2021年9月。

本稿は、学生たちの生の声を聞くため、手記を収集し分析した。これを通じて、コロナ禍における大学生の実態を探求し、学修状況や生活状況を理解することに努めた。そして、学生自身の細やかな心情の動き・変化が現れている部分に特に注目し、研究ノートとして一部抜粋し、その特徴を明らかにしつつコロナ禍の貴重な記録として保存することにした。

## 2. 対象と方法

2021年10月22日～12月28日の間、愛媛大学法文学部の学生を対象に、「コロナ禍における法文学部学生の学修・生活への影響について」手記を募集した。具体的には、「コロナ禍での大学生生活や日常生活を1,200字程度にまとめてください。」と依頼した。その結果、20件の手記が寄せられ、そのうち趣旨に沿う回答は19件であった。本稿では、この19件を分析対象としている。

### 2-1. 対象者の属性

対象者の属性<sup>5)</sup>は、以下の表に示すとおりである。

I D	性別	2021年度学年	コース	昼夜間主の別
2	女性	3回生	法政	夜間主
3	男性	3回生	G S	昼間主
4	男性	3回生	人文	昼間主
6	女性	4回生	法政	昼間主
10	女性	2回生	法政	昼間主
11	女性	2回生	人文	昼間主
12	女性	2回生	人文	昼間主
13	男性	2回生	法政	昼間主
14	女性	3回生	法政	昼間主

4) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱー2020年度学生座談会報告書ー」『愛媛大学法文学部論集』第51号（社会科学編），pp. 117-138. 2021年9月。

5) 愛媛大学法文学部には、昼間主・夜間主コースがある。更に、昼間主では2回生から、3つの所属コース（法学・政策学履修コース [法政]、人文学履修コース [人文]、グローバル・スタディーズ履修コース [GS]）に分かれ、夜間主では2回生から、2つの所属コース（法学・政策学履修コース [法政]、人文学履修コース [人文]）に分かれる。なお、手記を提供した2021年12月段階では、1回生は所属コースの振り分けは行われていない。

15	女性	2回生	法政	昼間主
16	女性	3回生	G S	昼間主
18	女性	4回生	人文	昼間主
19	男性	1回生		昼間主
20	男性	2回生	G S	昼間主
21	女性	3回生	G S	昼間主
22	男性	3回生	法政	昼間主
23	男性	4回生	法政	夜間主
24	男性	4回生	法政	昼間主
25	男性	2回生	法政	昼間主

なお、ID18までの学生は、昨年度も手記を提供した学生であり、同一 ID としている。

## 2-2. 分析方法

手記の分析を行うにあたっては、基本的にクリッペンドルフの内容分析手法（クリッペンドルフ、1989）を用いた。また、この分析手法を用いた学生のレポート分析に関する先行研究、森・大橋（2008）に多くの示唆を得ている。具体的には、以下の手順により分析を行った。

- 1) 手記内容を文脈毎に全て抽出する。
- 2) 文脈の内容により記録単位を作成する<sup>6)</sup>（抽出した文脈をまとめる）。
- 3) 類似性のある記録単位に基づき、サブカテゴリー名を付ける。
- 4) 同様の作業（類似するサブカテゴリーをまとめ）をし、カテゴリー名を付ける。

## 3. 倫理的配慮

調査対象者の学生には、研究の趣旨について書面による説明を行い、手記を提出した学生は研究への協力を承諾している。本稿では、プライバシーの保護のため個人名は特定されないように配慮している。

6) 記録単位とは、文脈毎に抽出した文章をさらにまとめたものである。例）「授業形態が変わり、大学に行く機会がなくなった。」という文脈は、「通学頻度の減少」という記録単位とした。

## 4. 結果の概要

本研究では、テキスト化された手記を文脈毎にまとめ、それら文脈内容により記録単位を作成した。その結果、記録単位数は371件になった。

次に、文脈内容の類似性に従って分類したところ、10個のカテゴリーに分類することができた（表1）。カテゴリーのうち、「友人関係」に関しては、大学が遠隔授業になり通学できなくなったことによる影響を記述している場合と、日常生活で外出の自粛が続いたことによる影響を記述している場合とに分けて整理した。さらに、10個のカテゴリーを類似性に基づいて3つのコアカテゴリーに分類し、それぞれ「大学生活」、「日常生活」、「その他」とした。以下、コアカテゴリーごとに分析していく。

表1 類似する記録単位から分類した10カテゴリー N=371件

コアカテゴリー		カテゴリー	
大学生活	194	1. 授業関係	152
		2. サークル・部活動	24
		3. 友人関係	18
日常生活	129	4. 行動面	66
		5. 友人関係	27
		6. 経済面	20
		7. 家族関係	9
		8. 体調面	7
その他	48	9. インターンシップ・就活	39
		10. 留学	9

### 4-1. 「大学生活」に関する内容分析

表2 「大学生活」に関する内容分析結果 N=194件

カテゴリー		サブカテゴリー		類似記録単位群	
授業関係	152	遠隔授業	107	A 授業に関する疑問・不満・改善案	46
				B 昨年度と変わらないが、慣れた	29
				C 時間や場所が自由に使えた	17
				D 自分に向いている	8
				E 授業の理解が深まった	7

授業関係	対面授業	29	A 対面が増えた	11
			B 対面が良い、対面で学習意欲がでた	7
			C 遠隔と対面の併用への不満、疑問	5
			D 遠隔の方がいい、対面への不安	3
			E 遠隔と対面、どちらも一長一短ある	3
	教員との関係	9	A 相談でき、心強い	8
			B 会ったことのない先生へ連絡するには勇気がいる	1
	昨年度の振り返り	7	A 遠隔授業でトラブルがあり慣れなかった	5
			B 精神的に不安定だった	2
サークル・部活動	対面活動に対する記述	17	A 計画的な活動ができない	10
			B 対面での活動が増えた、増えそう	7
	学生の気持ち	7	A 引継ぎ等、役割を全うしたい	4
			B 活動できないもどかしさや怒り	3
友人関係	友人が作れた 友人が作れない 学生の気持ち・心情 現実に対する記述	18	A ゼミ等の対面授業や SNS で学生同士の関わりが増えた	7
			A 交友関係が広がっていない	5
			A 周りの言動に嫌悪感を抱いた	3
			B 友達ができて嬉しい	1
			A 不安を話し合った	1
			B 学生同士の Zoom 会議等に積極的に参加した	1

「大学生生活」に関しては、3個のカテゴリーと10個のサブカテゴリーに分類することができた。このうち、カテゴリーについては類似記録単位の多い順に「授業関係（152件）」、「サークル・部活動（24件）」、「友人関係（18件）」だった。

「授業関係（152件）」のサブカテゴリーの内訳は、「遠隔授業（107件）」、「対面授業（29件）」、「教員との関係（9件）」、「昨年度の振り返り（7件）」であった。類似記録単位群で最も多かったのは「授業に関する疑問・不満・改善案（46件）」であり、「昨年度と変わらないが、慣れた（29件）」、「時間や場所が自由に使えた（17件）」と続いた。遠隔授業に関して不満や改善を求める声は50件近く存在するものの、遠隔授業2年目となり慣れたためか、昨年度よりも遠隔授業に対して肯定的な意見が多く見られた。

「サークル・部活動（24件）」のサブカテゴリーの内訳は、「対面活動に関する記述（17件）」、「学生の気持ち（7件）」であった。類似記録単位で最多のものは「計画的な活動ができない（10件）」であり、次に「対面での活動が増えた、増えそう（7件）」が続く。学生はサークル活動・部活動の再開を求めているものの、依然として制限が課せられた中での活動を余儀なくされ、活動停止が繰り返されることに対する苛立ちがうかがえる。

「友人関係（18件）」のサブカテゴリーの内訳は、「友人が作れた（7件）」、「友人が

作れない（5件）」、「学生の気持ち・心情（4件）」、「現実に対する記述（2件）」であった。最も多かった類似記録単位は「ゼミ等の対面授業や SNS で学生同士の関わりが増えた（7件）」であり、「交友関係が広がっていない（5件）」、「周りの言動に嫌悪感を抱いた（3件）」が続いた。

#### 4-2. 「日常生活」に関する内容分析

表3 「日常生活」に関する内容分析結果 N=129件

カテゴリー		サブカテゴリー	類似記録単位群	
行動面	66	変化あり	23 A アルバイトを始めた、増やした、資格勉強をした、忙しい	12
			B 外出・規制のためらい、不安が薄れた	6
			C 優先したいことがあるためアルバイトを辞めた、減らした	5
		学生の気持ち	A 生活・趣味を楽しみたい、資格に挑戦したい	11
			B まだ感染への不安や外出のためらいがある	7
			C 他人の行動に矛盾や怒りがある	4
		デメリット	A 望んだ活動、帰省ができなかった	8
			B アルバイトの感染リスクが高い	3
		変化なし	5 A 不便なこともなく不満がない、家の中でも快適に過ごせている	5
		メリット	5 A 時間に縛られることなく、好きな活動ができて良かった	5
友人関係	27	交流増加・変化	12 A 友人が増えた、交流が広がった	7
			B 交流方法の変化（ゲーム、SNS、電話等）	5
		変化なし	8 A コロナ禍以前より増減なく変わっていない	8
		学生の気持ち	A オンラインでマナーの悪い人がいた、増えた	3
			B 大学でなくても友人は作れる	1
			C コロナ禍で友人がつくれる人を尊敬している	1
経済面	20	交流減少	2 A 友人と疎遠になった	2
		影響あり	11 A 収入がない、減少して厳しい	7
			B 大学から臨時支援金を得た	4
家族関係	9	影響なし	9 A 収入等安定（増加）し、困ったことはない	9
		コミュニケーションの増加	4 A 会話が增えた、家族との時間が増えた	4
		学生の気持ち	3 A 親へ感謝、安心感を感じる	3
体調面	7	現実に対する記述	2 A 定期的に帰省・ビデオ通話などで交流をとっている	2
		不調	4 A 精神的な変化、気分の波があった	3
			B ワクチンの副反応に苦しんだ	1
		安定	3 A 精神的に安定していた	2
			B 運動を始めて精神的に良い影響があった	1

「日常生活」に関しては、5個のカテゴリーと16個のサブカテゴリーに分類された。類似記録単位は「行動面（66件）」が群を抜いて多く、「友人関係（27件）」、「経済面（20件）」、「家族関係（9件）」、「体調面（7件）」が続いた。

「行動面（66件）」のサブカテゴリーでは、「変化あり（23件）」が最も多く、「学生の気持ち（22件）」、「デメリット（11件）」、「変化なし（5件）」、「メリット（5件）」の順に続く。最も多かった類似記録単位は「アルバイトを始めた、増やした、資格勉強をした、忙しい（12件）」であり、続いて「生活・趣味を楽しみたい、資格に挑戦したい」であり、対面授業が少ないことで生じた空き時間の活用に前向きな姿勢が目立った。

「友人関係（27件）」のサブカテゴリーの内訳は、「交流増加（12件）」、「変化なし（8件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「コロナ禍以前より増減なく変わっていない（8件）」であり、次いで「友人が増えた、交流が広がった（7件）」、「交流方法の変化（ゲーム、SNS、電話等）（5件）」と続いた。

「経済面（20件）」のサブカテゴリーの内訳は、「影響あり（11件）」、「影響なし（9件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「収入等安定（増加）し、困ったことはない（9件）」で、次いで「収入がない、減少して厳しい（7件）」であった。

「家族関係（9件）」のサブカテゴリーの内訳は、「コミュニケーション増加（4件）」、「学生の気持ち（3件）」、「現実に対する記述（2件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「会話が増えた、家族との時間が増えた（4件）」だった。

「体調面（7件）」のサブカテゴリーの内訳は、「不調（4件）」、「安定（3件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「精神的な変化、気分の波があった（3件）」、次いで「精神的に安定していた（2件）」であったが、体調面についての記述が21件あった昨年度に比べて、全体的に自分の体調に関しての記述が少なかった。

### 4-3. 「その他」に関する内容分析

表4 「その他」に関する内容分析結果 N=48件

カテゴリー		サブカテゴリー		類似記録単位群	
インターンシップ・就活	39	影響あり	16	A オンラインでの便利さ、金銭的なメリット	9
				B 活動が制限された、中止になった	4
				C オンラインになり不便、職場の雰囲気分からない	3
		学生の気持ち	10	A 焦り、不安、戸惑い、残念な気持ち	6
				B 努力し、チャンスをつかみたいという前向きな気持ち	3
				C 上手く活動できず残念な思い	1

インターンシップ・就活		現実に対する記述	13	A 感染対策が行われた、工夫をした	4
				B 中止になったインターンシップの代替措置があった	3
				C 公務員試験や大学院受験の勉強をした	3
				D 積極的に参加した、活動した	3
留学	9	渡航中止だった	9	A 今後渡航できることを期待しつつ、渡航できない時のことも考えたい	4
				B 中止になりショック	3
				C オンライン交流会へ参加した	2

「その他」に関しては、2個のカテゴリーと4個のサブカテゴリーに分類された。類似記録単位は「インターンシップ・就活（39件）」、「留学（9件）」だった。

「インターンシップ・就活（39件）」のサブカテゴリーの内訳は、「影響あり（16件）」、「学生の気持ち（10件）」「現実に対する記述（13件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「オンラインでの便利さ、金銭的なメリット（9件）」であった。

「留学（9件）」のサブカテゴリーは一つで、「渡航中止だった（9件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「今後渡航できることを期待しつつ、渡航できない時のことも考えたい（4件）」とする記述だった。

## 5. 分析と考察

今回の手記で、類似する記録単位数が最も多かったのは、「大学生活」コアカテゴリー中の「授業関係」カテゴリー（152件）であった。2020年度手記と異なる点は、2020年度手記では全員が遠隔授業について触れていたが、2021年度手記では3名の学生が授業について触れていなかったことである

### 1) 大学生活に関する内容分析

今回の手記の「授業関係」（152件）では、対面授業になった時期もあり、遠隔と対面の両方の向き不向きに関する記述や、併用することに関する記述がみられた。

類似記録単位数が最も多かったものは、昨年度同様、授業を行う教員への不満や改善を求める意見（46件）だったものの、肯定的な記述（61件）の方が多くなったのが特徴的である。これは、学生自身が遠隔授業に慣れてきたことや、遠隔授業の特徴を活かし専門科目の理解が深まったことや、通学時間が存在しないことから自由時間を捻出しやすかったことも影響している。



互いに高めあえる、励ましあえる友人が傍にいないのは、難しい内容の授業や疲れている日々と一緒に乗り越える友人がいる場合と比べるとやはり寂しさを感じます。しかしながら、「場所又は時間を選ばない」「通学時間・準備時間の削減」には昨年同様かなりメリットを感じました。

.....

昨年同様あまり人混みに行くことはありませんが、心の余裕をもって余暇を楽しむようになりました。(ID6)

私は一回生で対面が主な授業形態を体験したことがないため、現在のような遠隔が主な学習については正直なところ、特に不満に感じたことはありません。逆に、往復の通学時間がかからず、それに伴う身支度の必要もないため拘束時間が減り、自由に使える時間が増えて便利に感じています。母に資格取得を勧められていたため、自由時間を使って取得することもできました。また、講義動画を何度も見返すことが出来るのが遠隔の満足度を向上させています。大学の講義は難易度が高く、憲法などの講義は何度も見返したり一時停止して学習したかったので、遠隔はその需要を満たしてくれ、困ることはありませんでした。(ID19)

前年と比べてPC やオンライン授業の受講方法に慣れ、自分のキャパシティが超えないように調節しながら受講ができていますので、課題に追われることもなく安心して授業を進められていると思います。(ID15)

対面授業の再開を待ち望んでいた学生は、対面授業へ移行したことにより、学習意欲が高まったと実感している様子である。

対面の感想を述べるなら、まず感じたのが、教員との無言の意思疎通の重要性だ。それは、講義の中でわからない単語が出た時、受講者全体が声を出したりはしないが、少し雰囲気が変わり、少しして教員がその雰囲気を感じ取り、その単語の解説が始まる。といったものであり、この意思疎通は、Zoom の講義ではなかなか発生しないものであり、チャットなどで送っても、気づかれるのに時間を要してしまう。もうひとつ感じたことは、音である。Zoom などの講義で聞こえる音はイヤホンをしていることもあって自分の周りの微かな音と、Zoom での発言者によるものだけである。しかし、対面では、同じ講義を履修している人たちから発せられる字を書く音や、教科書などをめくる音が聞こえてくる。この音から生まれる一体感は、遠隔では得られない学習意欲をそそる。この2つの要素は、遠隔の講義で決して感じられるものではなく、対面によってしか得られない、学習にとって貴重かつ重要なものだと思う。(ID13)

一方で、遠隔授業と対面授業のそれぞれ長所、短所に気づき、対面授業の再開後も遠隔授業も継続してほしいとの希望を示す記述も見られた。

遠隔2年間という時間を過ごし、遠隔も対面も一長一短で、現時点ではどちらの方がいいとは言い切れないと感じました。(ID2)

個人的には、遠隔非同期型の授業が多かったのはむしろ良かったと感じている。興味のある講義をとりたいが公務員講座が夜の時間帯にあり、またアルバイトや勉強の時間を確保する必要があった身としては自分のペースで学習ができるのはありがたいものだった。だが、対面授業が無かったほうがいいのかと言えばそうではなく、友人と会い話す機会にもなることから対面授業がいくつかあったことも良いことだったと思う。(ID14)

オンラインだからこそよりよくなる授業は相変わらず楽しく受けています。例えば、学生同士の意見交換の場では匿名だからこそ正直な本音が言えたり、攻めた発言も出来るので、顔も名前も見えないこの授業形態での醍醐味だと思います。

ですがやはり、非同期だとリアルタイムでの意見交換が出来なかったり、提出日を見逃して課題が提出できなかったり、伝えたい事がうまく伝わっていなかったりなどの失敗が多いと感じるので、ほとんどの授業は対面で行う方が良いだろうと思います。

……

今年の第4Q から全面対面授業になるとのお知らせがきましたが、半分楽しみ、半分不安です。対面授業になると授業の面白さも増すと思いますが、今まで自由に使えていた時間が突然拘束されるようになるので、タイムマネジメントに力を入れて、精神的にも身体的にも過ごしやすいスケジュールを組む必要があると強く感じます。(ID12)

大学に通いながらも、実家で授業を受けることができることに、この上ない便利さを感じた。コロナ禍以前は考えられなかったことだ。これから実現することはないかもしれないが、学生が遠隔か対面かを選択できる授業が増えれば、より快適な日常生活を送ることができると思う。(ID22)

さらに、遠隔授業の後、対面授業だった場合など、通学・移動時間が入ることによる弊害を記述する学生もあり、遠隔授業と対面授業の併用の課題が指摘された。

後期はバイトとサークルの予定にオンライン授業と対面授業の移動時間や準備時間が加わって、前期よりかなり忙しくなったように感じました。学内に設置されている自習室を利用するほど時間が切羽詰まっているわけではなく、20分では少し間に合わないな、と感じることがよくありました。(ID15)

対面式と遠隔式が並行して行われているので、大学内で遠隔授業を受けなければ、講義に間に合わないという人もいるのではないかと思います。(ID24)

「サークル・部活動」に関しては、少しずつ対面での活動が出来るようになったことの喜びと充実した気持ちの記述が書かれている一方で、計画していた活動が変更を余儀なくされることへのもどかしさや強い憤りを表す記述が見られた。

2年生になって規制が少し緩和した今、サークルのある日には積極的に参加するようにしています。運動をする機会が出来て健康的な生活を送れるようになり、先輩や後輩との交流も増えました。昨年は外出自粛でずっと家に閉じこもっていたので、家の外でたくさんの人とスポーツができるということが嬉しくて、サークル活動が再開してからはかなり充実した生活が送れていると思っています。(ID12)

サークル活動に関して、強化練習や合奏が終わった後のモチベーションが上がっている時に限ってサークル活動が禁止されたり、学内・学外の活動に学生生活支援課から許可が下りず断念した活動がいくつかあり、仕方のないことではありますが「タイミング悪いな」と思うことが何度かありました。サークル活動に限ったことではありませんが、以前、学長から「愛媛県では感染拡大は抑えられていますが、東京では感染が急増している」といったコメントがあり、東京や東京周辺から来ている学生がいることも理解していますが、東京都で感染拡大しているから愛媛県でもあらゆる活動を禁止するといった内容だったので、「そんなことを言っていてはいつまでも活動を全面再開できないのではないか」と不安に感じました。(ID15)

新入生歓迎が思うようにいかず、主に歓迎シーズンとなる期間にはピラの配布が禁止された（今、活動再開になってもこのピラの配布についてはブース以外の措置は行われておらず、ピラの余りについて考えているところである）。●●部の部長として何ができるか考えた際に多くの zoom 説明会を開催し、大学内や大学外の機関が開催する部活動紹介に参加し、また（最終的に2回の開催だったが）見学者を交えた大学構内●●会を行うなどをしたが、今となってはこれらが正解だったのかどうか分からない。今も、部活動の課題はある。書面上は●●●●●●●●●●に行くことができるようにはなっているが感染対策が本当にできるのか疑問で実施はしていない。また、他の部活動との連携は難しく、●●●●も請け負いづらいところがある。

ちなみに、指定地域に行ったにもかかわらず待機無しで部活動を行った人間に対しては我々学生団体が一時停止という影響を受けたため恨んでいるところもある。（ID14）

私は入学前から●●部に入部することを決めており、入学早々入部したのですが、練習ができず、体が動かせず、歯がゆかったです。さらに、新歓がなかったことが大きく響きました。自分が入部できても同回生の人が入部せず、結局、友達ができないといった状況でした。（ID25）

特筆すべきは、サークル・部活動の活動が2年間中止されたため、活動ができないまま後輩へ引き継ぎせざるを得なかった学生の心情についてである。学生自身が活動出来なかった戸惑いを持ちつつ、後輩へと活動をスムーズに引き継ぎたいとの前向きな気持ちが記述されていた。

サークルは昨年から●●●ボランティアに所属しています。

……

コロナ前の活動が●●●●●など実際に現地に行かなければできない事だったため入学当初から本格的な活動を行うことはできませんでしたが、これからは本来の活動を行うことができそうです。しかし、●●●ボランティアの実働メンバーは1、2回生であるため、活動内容の引継ぎが課題となっています。今年は例外として3回生の先輩が実働メンバーに残って下さいましたが、1、2回生が未だに本来の活動を行っていないため、来年への引継ぎが上手くいくように積極的に活動したいと考えています。（ID11）

サークル活動に関しては、依然として厳しい活動制限を設けられており、対面活動を再開するための複数の書類を何度も提出しているが、次の段階に円滑に進むことができていないのが現状だ。私たち3回生の活動期間が有限であることを踏まえて、今後も活動していく後輩たちがスムーズに活動に取り組めるよう自分の果たすべき役割を全うしたい。(ID21)

大学生活での「友人関係」については、昨年度に比べ対面授業を通じて学生同士の関わりも増えたことを喜ぶ記述が目立った。なかには、いまだ交友関係が広がっていない学生もいたものの、昨年度のような不安で孤独な気持ちを吐露する深刻な様子は見られなかった。

一方で、友人や他の学生の態度に否定的な記述も見られた。対面での交流が増えたことにより、直接顔を突き合わせることができる人間関係の中での反応とも言えるのではないか。また、コロナ禍をきっかけに、SNSを含む交流方法が多様化してきている。そのような中で、SNSでの発言を含め、他人の言動に苦言を呈しているのかもしれないことを想像すると、コミュニケーションの難しさを感じる一面でもあるように思われる。こうした学生心理については、今後も継続的に検討していきたい。

ゼミに関しては、去年は一年を通して2、3回しか同級生らと顔を合わせる機会が無かったが、今年の第3クォーターは大学側で対面授業の規制緩和がなされ、毎回対面で授業を受けた。私にとってはゼミが唯一の対面授業であったため、水曜日はなんだか特別な曜日だった。全ゼミ生での顔合わせも夏に実施され、同期のゼミ生とはほぼ毎週会っているため去年よりも距離が縮まり、授業前に世間話をするまでになった。ゼミならではの交友関係を築くことができ非常に嬉しい。(ID21)

講義や大学生活に文句ばかり言うにもかかわらず自分では行動を積極的にしようせず、また講義の課題を出し忘れるにもかかわらず締め切りに文句を言うなどの人がいた。友人ができにくいことは承知の上だが、全く人と関わろうとしないにもかかわらず「友人ができない」と言われても正直困る…と思うし、講義にも先生の人間性はあることは分かるが、自分の我儘だけが通用する世間ではないとも思う。(ID14)

## 2)「日常生活」に関する内容分析

「日常生活」に関する記述では、「行動面」(66件)のうち、類似記録単位は「アルバイトを始めた、増やした、資格勉強をした、忙しい(12件)」が最多であり、「生活・趣味を楽しみたい、資格に挑戦したい(11件)」が続く。遠隔授業、主に非同期

(オンデマンド)型授業の実施により、学習する時間帯を自ら設定できるため、授業以外の自由になった時間が増え、資格の勉強をしたり、アルバイトを始めたり、旅行などの趣味を楽しんだり、自身の成長のための挑戦を試みるなどの記述が増えた。アルバイトの開始が本来求められる授業内容の理解を妨げることになっていないかなどの懸念はあるが、総じて学生は大学生活以外においても、前向きな姿勢を持ちつつあると評価できる。

授業が非同期だと時間を自由に使えるので、その時間でアルバイトをたくさんしました。授業があると絶対できないような時間帯のバイトなど、非同期ならではの貴重な体験がたくさんできて、アルバイト先で友達もたくさん増えて、他大学の人たちとの交流も出来ました。(ID12)

まだまだこれからもコロナとの生活は続くと思われるし、オミクロンなる型も現れていると聞く。ただ、緩和はされつつあり当初のころよりは動きやすくなっているのもまた事実であるから、私の趣味である「食」や「旅行」も含めて節度を保ちつつ生活していきたいと思う。(ID14)

今後、with コロナの時代の中で成長が出来る人は逆境をチャンスと捉えて努力することが出来る人だと思うため、私も、今の私にできることをじっくりと考えながら挑戦を続けたい。(ID16)

一方で、一部の学生からは、望んでいる活動が出来なかったことへの記述や、自治体等による感染拡大防止対策の緩和が行われたものの、自身への感染の不安から外出をためらう心境や、アルバイト先での感染リスクへの不安、家族の事情等により行動を自粛せざるをえない状況に対して腹立たしさや矛盾を感じている学生も複数存在していた。

コロナの感染者に関して、私は大学生よりも社会人が飲み歩いているせいで感染者数が増えているような印象があったので、身勝手な大人のせいで、なぜ大学生がここまで活動制限されなければならないのだろうと、腹立たしい気持ちになった時期もあります。また、小、中、高、社会人はとっくに対面に移行しているのに、いつまでたっても大学はオンラインが基本で、なんだかなとも、今年の夏あたりは思っていました。(ID2)

私は、温泉施設の清掃アルバイトをしていた。コロナ禍になったことで、不特定多数の人間が裸になって集まる場所で働くことに、少し不安はあった。マスクもしていない客が使い終えたタオルを無防備に触るのは、正直、気持ち悪いと感じていた。会社からは気休めにもならない程度の消毒液が1回だけ配られた。これでは、いつ感染したとしても仕方がない環境であると感じていた。こうしたことは私に限ったことではなく、多くの大学生は、アルバイトとして感染リスクの高い場所で働くことを余儀なくされていると思う。大学での感染リスクは下がったのに、日常生活での感染リスクはむしろ上がったかもしれない。(ID22)

両親に関しては、二人とも医療従事者なのだが、特に母親に関しては去年同様同居家族以外の食事禁止の規制を引き続き課されているため、それに対して自分が友人との食事会に参加するのを躊躇う気持ちが現在ある。(ID21)

日常生活での「友人関係」について、昨年と友人数や付き合いの程度について「増減なく変わっていない(8件)」旨の記述が最多であったが、「友人が増えた、交流が広がったという記述も同程度(7件)」の件数が見られた。また興味深い記述として、「友人との交流が接触しない交流方法に変化した(5件)」との記述が複数見られた。

学校の外でたくさん友達ができ、コミュニティがどんどん広がっていきました。一番大きかったのはアルバイトです。授業が非同期だと時間を自由に使えるので、その時間でアルバイトをたくさんしました。授業があると絶対できないような時間帯のバイトなど、非同期ならでは貴重な体験がたくさんできて、アルバイト先で友達もたくさん増えて、他大学の人たちとの交流も出来ました。(ID12)

今年の新入生はTwitterやInstagramで交流を図ろうとする学生が昨年度以上に多かったと感じている。(ID14)

実家に帰ったときは必ず地元の友達と遊ぶのですがそれができなくなり、友達との距離が遠くなった気がしました。その分逆に、電話をすることが多くなりました。オンラインのゲームをいっしょにやりながらや、お酒を飲みながらなど携帯を使って遊ぶことが多かったです。大学での友達とも、コロナ禍以前はカラオケや居酒屋などで遊んでいたのですが、そのような遊びはできなくなり、地元の友達同様に電話をすることが多くなりました。(ID23)

経済面では、アルバイト等で収入が安定している学生がいる一方で、昨年度に引き続き経済的に厳しい生活をしている学生もあり、臨時奨学金や愛媛大学が行っている「学生等の学びを継続するための緊急給付金」を取得することで、就職活動や資格取得のための資金に役立てている旨の記述がみられた。

去年と同様苦しい状況を強いられたように思います。両親共働きではあるものの、父親は自営業、母親は契約社員と基本的に収入が安定しているわけでもないため、時には平均月収を下回ってしまうこともございました。

……

私は新たに塾のアルバイトを始めることができました。理由としては私が英語を教えたいとかねてより思っていたためです。実は以前から塾講師のアルバイトを探してはいたのですが、実際問題コロナ禍によって塾講師が飽和状態にあったため、今年の9月まで約半年間無職の状態でした。

……

私は5万円の臨時奨学金もいただけたため、ありがたく就職活動に利用させていただいております。(ID3)

8月に新型コロナウイルス感染症対策緊急支援金として5万円給付して頂き、来月も再度5万円の給付をして頂くことが決定している。この支援金を活用させて頂き、資格取得のための資金に充てることが出来た。新型コロナウイルスの影響でアルバイトの収入が減少したため、目標としていた資格の取得は諦めていたが、大学からの支援を受けることが出来たため、資格試験に挑戦することが出来、この一年間で、二つの資格を取得することが出来た。(ID16)

家族関係では、家族との交流が深まったとの記述が複数見られた。具体的には、家族との会話が増えたことや、帰省が可能になったこと、帰省できない時もビデオ通話を通じて交流していること、そして両親への感謝が書かれているものもあり、肯定的な記述が目立った。

GW やお盆、長期休みには実家に帰っている。また、愛媛にいたときは1週間に1、2回ビデオ電話をしている。一人暮らしを始めて、その日何があったかなど、親に色々話していたんだなと気づいた。実家に帰った日は、自分でもこんなにお喋りだったっけと思うくらい、ずっと何か話している。(ID10)



これまでのコロナ禍を振り返ってみると、コロナ前に比べて家族との時間が確保出来たり、ゆっくり今後の人生について考える時間を取れたり、めまぐるしく時間が過ぎていた時には得られなかった時間を得ることが出来ている。コロナ禍は、自分の人生の歩みのスピードを少し緩めて、自分自身を改めて考え直すことが出来る良い機会にもなったと思う。(ID16)

「体調面」(7件)については、記述が21件あった昨年度に比べて、約3分の1に減少している。全体的に学生自身の体調に関しての記述が減少している。これらは何を意味するのか。2020年度の手記では、感染拡大に伴う緊急事態宣言の発令による自粛生活の推奨、自粛の一部解除が繰り返されたことにより、心身ともに体調を崩しがちになる旨の記述が多く、なかには「昼間の飲酒」にも言及している学生が存在した。今回(2021年度)の手記では、体調が良いとか回復していると書かれているわけではなく、体調に関しての記述が、ほぼみられない。コロナ禍での制約を伴う生活が2年目を迎え、ある程度、諦めの思いもあってか、これを受け入れているのかもしれない。そして、記述されていた体調面で、今回新たに加わったことは、ワクチン接種による副反応に関する記述だった。ある学生の手記では、書かれた手記の大部分がワクチン接種についての内容だった。

2回目は前回の通りスムーズに接種を終えることができ、接種当日は全く副反応が出ませんでした。いつも通りに就寝したのですが、翌朝5時頃、あまりの頭痛で目が覚めました。スマホの画面を見るのもしんどくて、時刻を確認するのが精一杯でした。枕元に飲み物と体温計と洗面器を用意しておかなかったことを後悔しました。10時までの5時間程、39度後半から熱がずっと下がらず、死にそうな思いで耐えました。時には40度を超え、渴きと頭痛で酷い有様でした。声もなかなか出せず、早朝だったので家族に呼びかけるのも辛くて、やっと水を持ってきてもらえたのは6時頃でした。自宅生だったので家族の手が借りられましたが、これが一人暮らしだったらと思うとぞっとします。朝食におかゆとコーンスープと林檎を持ってきてもらったのですが、計6回に分けて睡眠を挟みつつ、3時間ほどかけて食べました。あまりの頭痛とだるさと息苦しさで、お手洗いに立つのも眠りにつくのも至難の業でしたが、極力寝よう努めました。10時を過ぎて38度台に落ち着いてからは一気に楽になりました。頭痛やだるさは残っていましたが、それ以前が地獄のようだったので随分ましでした。(ID18)

### 3)「その他」に関する内容分析

「インターンシップ・就活」に関しては、オンラインでの就職面接等の便利さや、自宅で受けられるために交通費がかからないと経済的な利点を書いている者がいる一方で、諸活動が制限されたことにより、インターンシップ先の企業の雰囲気やわから

ないままだった無念さや、目前に迫る就職活動への不安が書かれているものが見られた。

就職活動面については、私としては逆に追い風の影響を受けたように思います。というのも、私が一番有利であると感じたのは Web 形式の説明会やセミナー、面接などが主流となったことで、わざわざ遠方まで行かずに就職活動が完結するようになったということです。こうしたコストパフォーマンスの高い就職活動が可能となったことで、都会や地方関係なく有益な情報にアクセスすることができ、その差をある程度は埋めることができたように思います。もちろん対面形式のインターンシップへの参加に関しては少々難儀ですが、オンラインで就職活動が完結することから移動にお金がかからないため、その分ここぞというタイミングで就職活動にお金が使えするというのはかなりポジティブな点であると認識しております。(ID3)

この夏、二つの企業の対面インターンシップへの参加を予定していた。しかし急激な感染者数増加に伴い、大学の方から対面のインターンシップへの参加を自粛するように指示が出された。代替措置として Web インターンシップを実施してくれた企業もあったためそのおかげで参加できた企業もあったが、対面のインターンシップに比べ活動内容が制限されたり、企業によっては参加自体が難しかったりしたため、円滑に就職活動を進めることは出来なかった。また、企業の方と直接顔を合わせることも出来ず、実際の職場の雰囲気等を知ることも難しかった。(ID16)

留学については、国内外の感染状況の深刻さから、実現は困難であるとの認識が大きかったのか、渡航の目途が立たない事実を受け入れ、他のことにも挑戦しようとしている姿勢が見受けられた。

国外との交流という面ではとても不便なのではないかと推測される。こういった移動の制限とは反対に、グローバル化はますます進んでいて、私達はこれからどのように経済活動を行うのかということを考えざるを得ないし、それを踏まえた上で身の振り方を決める必要があると痛感している。(ID4)

コロナウイルスによって留学や海外渡航が中止になりました。そのため海外の大学との交流がオンラインで行われるようになったため、私は海外の大学生と繋がるために学部内でのオンライン交流会などに積極的に参加するようになりました。しかしながら、オンラインと対面での交流では対面での留学の方が楽しいような気がしました。もちろん海外の人と交流することはとても楽しくて、さらに留学や海外渡航をしたいという気持ちが高まりました。(ID20)

## 6. 今後の課題

本研究は、コロナ禍の学生生活を理解するために、愛媛大学法文学部学生によって書かれた手記を分析したものである。分析対象とした手記は、法文学部全学生のわずかな数に過ぎず、また、時々刻々と変化する状況で、1年間を通じて学生のプロセスや変化を捉えることはできていない。また、手記を寄せてくれる学生は、元々、「積極的・活動的・前向き」な学生である可能性も否定できない。さらに、「積極的・活動的・前向き」でなければならないという、ある種の「過剰適応」が起きていないかどうか、公表は匿名であるものの、所属学部へ提供することに対して、他者評価を気にしている場合も留意しておく必要があるかもしれない。

上記を考慮しても、総じて分析対象とした手記からは、コロナ禍でも、葛藤しつつもたくましく、またしなやかに、さらに試行錯誤しながら、大学生活を過ごしている学生の経験や思い等が浮かび上がってくる。そして、その一部を整理しこの場で公表できたことは、意義あることであると自負している。とりわけ、昨年度と比較することにより、学生の気持ちや行動の変化を把握することができたと考えている。

振り返ると、新型コロナウイルス感染症の蔓延が始まった2020年度は、講義のほとんどをオンライン（遠隔授業）で行わざるを得ず、学生も教職員も新たな授業形態に戸惑い続けた一年であった。学生にとっては、遠隔授業により学ぶこと自体が大きなストレスであり、遠隔授業の長期化とともに、友達らと交流機会を持てないなかで孤独感を強めて行ったことが、手記のなかで辛い出来事として記述されていた。

本稿でとりあげた2021年度の手記では、コロナ禍での学生生活は2年目を迎え、新たな授業形態に慣れてきたこと、遠隔授業の非同期型授業のコンテンツの質の改善、さらに対面授業も時期によっては再開したこともあり、大学生活全般にわたって肯定的な内容も目立つようになった。2022年2月に実施した学生座談会でも、対面授業を希望する声とともに、好きな時間に自分のペースで学ぶことを可能とする非同期（オンデマンド）型授業の「快適さ」を訴える声や、今後も継続を求める声が一定数見ら

れた<sup>7)</sup>。これらは手記と座談会の発言に共通することで、今年度の特徴は、趣味や資格を取るための勉強等、大学の授業以外のことに目を向ける時間と気持ちの余裕が学生に感じられることである。しかし、法文学部全体の中ではこのような前向きな方向に転じられていない学生もいることを心に留めておく必要もあるだろう。それと同時に、このような学生の声が、対面授業への回帰が進む中でどのように変化していくのか。今後も継続的に調査を行い、学生の様々な意識や行動の変化を把握していきたい。

## 謝辞

手記を寄せてくれた法文学部学生の方々ならびに手記募集に携わって頂きました法文学部の教員に感謝の意を表します。また、この研究は、令和3年度法文学部戦略経費、令和3年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革 GP）及び JSPS 科研費19K21723の助成金交付により遂行されたものです。

## 参考文献

- 1) クリップENDORF (1989)『メッセージ分析の技法：「内容分析」への招待』（三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳）勁草書房．
- 2) 森ウメ子、大橋千栄子（2008）「手記から学ぶ病児の理解－学生の読後感レポートからの分析－」、『太成学院大学紀要』10,121-131.

---

7) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴ－2021年度座談会報告書－」『愛媛大学法文学部論集』第53号（社会科学編），pp.133-150. 2022年9月.

付録：図 A 国内の感染者数 1日ごとの発表数 (NHK まとめ)

国内の感染者数 1日ごとの発表数 (NHK まとめ) (2022年6月28日閲覧)

出所： [https://www3.nhk.or.jp/n-data/opendata/coronavirus/nhk\\_news\\_covid19\\_domestic\\_daily\\_data.csv](https://www3.nhk.or.jp/n-data/opendata/coronavirus/nhk_news_covid19_domestic_daily_data.csv)

